



今月は、村井理事・事務局長の巻頭文です。

お品書き
【その巻】CODEレター VOL.21
【その式】第2次スリランカ現地視察レポート

以上

Letter

2005.3.23 VOL.21

CODE海外災害援助市民センター発行
〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
TEL : 078-578-7744 FAX : 078-576-3693
e-mail info@code-jp.org URL <http://www.code-jp.org/>
郵便振替 : 00930-0-330579

阪神・淡路大震災とボランティア

村井 雅清

CODE 海外災害援助市民センター 理事・事務局長

2005年1月17日午前5時46分、私は「阪神・淡路大震災 被災地NGO協働センター」の事務所の庭に建立されている観音様の前で集まっていた約20名のボランティアの前で挨拶をした。「あれから10年。やっとという感じです。長かったです。この10年間、被災地KOBEがここまで来たのもみなさまのおかげです。ここからお礼を申し上げます。」挨拶をしながら10年間の出来事が走馬灯のように脳裏を駆け巡った。実にいろいろなボランティアさんがいた。1人ひとりの顔が思い出される。

6433名をなくした阪神・淡路大震災のその後の調査で明らかになったのは、倒壊家屋の下敷きになっていた約35000人のうち、生き残った隣近所の人たちが27000人も救出したという事実。おそらくこの行動が「ボランティア元年」のページであろう。その後、被害の少なかった西区の農協関係者から毎日1万個のおにぎりが被災地に届けられ、北区の市民は何かできることはないかと被災地に駆け付けてきた。これが2ページ目の姿ではないか。

あの時までの災害救援分野は、緊急救援や救急医療などの専門家が活躍する舞台であって、普通の市民の出る幕ではなかった。しかし、こうした10年間の普通の市民のボランティア活動のおかげで、被災地は再建されてきたといっても過言ではない。

「ボランティア元年」という言葉に象徴されるほど、阪神・淡路大震災から「ボランティア」という言葉が注目されている。確かに、このボランティア現象は、現在の日本社会におけるボランティアやNPOをめぐる状況の原点として語られることが多い。

そもそも日本における「ボランティア」というのは阪神・淡路大震災で始まったわけではないということは多くの研究者や学識者が指摘している。しかし、震災という出来事によって、ボランティアという言葉がより多くの人びとに語られ、ボランティアをするという行為がより身近になったことは確かである。実際に、あの時被災地に来た137万人のボランティアのうち、初めてのボランティアという方は6割から7割もいたようだ。震災はごく普通の人たちが気軽に救援活動にかかわることができるある種の「ボランティア文化」を築いた。さらに、あの時の世界中からの支援のお返しのために、この10年間で被災地を中心に国内外の災害救援活動が活発に展開されてきた。

震災後10年と2ヶ月が経つ。この間のボランティアの役割や功績には計り知れないものがある。いまま災害復興公営住宅などで孤独死が問題になっている。たまたま亡くなったときは1人だったかもしれないが、きっとボランティアには看取られていたのだと信じたい。それほどかけがいのないボランティアがたくさん被災地にいた。

アフガニスタンのぶどう再生プロジェクト

CODEは現在3つの海外プロジェクトを行っています。その1つであるアフガニスタンのぶどう再生支援プロジェクトが今年で3年目に入りました。CODEは2001年の米国による空爆以降、アフガニスタンの復興支援を続けています。内戦で焼き討ちにあったぶどう畑は順調に生育し、2年目で農家に貸し付けた融資が返済されるまでになってきました。昨年は、融資を受けた約300家族のうち約120家族が融資の1部とその利子分を返済しました。



すくすく育っているぶどう

ある女性は、ぶどう畑に必要な水や労働力に基金を使いました。その結果、日本円で2万円相当のぶどうを収穫し、借りたお金の半分を返済することができました。「もし、ぶどう基金からお金を借りることができなければ、私はこの村にはいられなかっただろう」と彼女はぶどう基金にとても感謝しています。

このように、融資の1部が確実に返済されたため、CODEは今年の融資対象を新たに113家族に増やしました。コツコツとした地道な支援ですが、息長く支援を続けていきたいと考えています。現地では3月から新たなぶどう作りが始まり、アフガニスタンの治安を確認した上で、4月に視察を実行したいと思いません。今後ともご支援をよろしく願いいたします。



ぶどう畑を耕している住民

ぶどう基金への寄付は1口3000円(1年間)からで、寄付者は「ぶどうの木オーナー」として登録されます。郵便振替00930・0・330579です(口座名CODE、通信欄にぶどう基金と明記)。お問い合わせは事務局までよろしく願いいたします。

中学生によるスマトラ沖地震津波の支援イベント

CODEの事務局スタッフの飯塚が福井県福井市にある、かつやま子どもの村中学校のスマトラ沖地震津波の支援イベントでスピーチをしました。

かつやま子どもの村中学の生徒は、スマトラ沖地震について多くの人に関心を持ってもらおうとこのイベントを開催しました。イベントでは、生徒によるスピーチと劇、そして、CODEのスタッフによるスマトラ沖地震津波の報告がありました。

このイベントは生徒が主体になって実現しました。創作劇のシナリオは、まず生徒全員がそれぞれのシナリオを書き、話し合いのうえである生徒のシナリオに決めたそうです。その

シナリオは、科学者が津波予防の必要性を政治家に説くが、発生時期が分からない自然災害に予算はつけられないと政治家は断ります。その直後に地震が発生し、大津波が起こり、多くの死傷者が出てしまうという話です。いつ発生するか分からない自然災害ですが、災害に備えることの大切さを中学生は創作劇をとおして訴えました。



中学生による創作劇

そのシナリオを書いた宮本悠希さんは「地震の恐ろしさが分かった。そしてその後、水不足や食糧難、疫病などが起これば貧しい地域はさらに死者が増えてしまう」と述べ、先進国と発展途上国の貧富の差についても、劇をとおして語りたかったそうです。

スピーチを担当した樋口成泰さんは地震の概要や被害、援助活動等を発表し、「多くの人々の協力が必要な状況。このイベントをとおして、一人でも多くの人に関心を持ち、助け合えるようになるとうれしい」と語りました。

他にも津波について調べた内容をポスターにして展示したり、スマトラ産のコーヒーを置いたりして募金を呼び掛けました。

イベントには、中学生がちらしをまき参加を呼びかけ、その結果地元の人々、約30人が参加しました。福井県では、昨年7月に水害がありましたが、このような中学生主体の防災教育は、中学生本人だけではなく、地元の人々も巻き込むすばらしいイベントでした。

【ご連絡】総会の開催

例年通り、5月17日にCODEの総会を開催します。総会は正会員全員で構成され、CODEの一年間の事業計画と収支予算を決定、承認する機関です。総会では、正会員は議決権があり、賛助会員はオブザーバーとして参加することができます。ご助言・ご質問等がありましたら、お気軽に事務局までお知らせください。

ありがとうございます2/10~3/10

会員・寄付者ご芳名(以下順不同・敬称略)

一般寄付(緊急援助の寄付は除く): 大星顕史(徳島) やまばしりゅうすけ(神奈川) 島本久嗣(埼玉) 山田昌弘、三島一男、笠置りか(以上兵庫) 桂田康子(大阪)

会 員

正会員: 松本誠(兵庫)

賛助会員: 酒井富美子(兵庫) 近藤健央、北後明彦(以上大阪) 宇田川規夫(神奈川県)

編集・発行 CODE海外災害援助市民センター

〒652-0801 兵庫県神戸市兵庫区中道通2丁目1番10号

TEL: 078-578-7744 FAX: 078-576-3693

e-mail info@code-jp.org URL <http://www.code-jp.org/>

郵便振替: 00930-0-330579